

---

# 満天

印殷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

満天

### 【NNコード】

N8561C

### 【作者名】

印殷

### 【あらすじ】

いじめとは何か。 友情とは何か。 一人の少年を通して周りが変わつています。

## 第1話

「やーい、ばーか」

転校して来た天は、小学校の生徒となかなか交ざり合えなかつた。天が発言すると、他の生徒はすぐに反対意見を出す、そんな事があつた。

だが天は別に恐れではないなかつた、なぜなら前の小学校からもいじめられていたからだ。しかし、北海道の小学校に居たときは、満天の星空のようなキラキラした笑顔があつたのだ。だがその満天の笑みがこぼれることはなかつた。

## 第2話

毎日のようにいじめられながらも、天は成長していた。天はもちろん学校に勉強しに来ている訳だが、「宝物」が欲しかったのだ。

北海道に居たときのように・・・。ある朝、天が学校に来ると黒板に、

「天と仲良くする奴はクラスの裏切り者」と書きなぐつてあつた。ドンと頭痛が響いた。と、同時に、叫ばずにはいられなくなつた。

「誰が書いたの？」

天の悲痛な叫びが教室を貫いた。しかし、その心からの叫びに誰一人として耳を傾けるものはいなかつた。・・・どうして、自分だけがこんな目に遭わなければいけないのか。何故、自分にだけ宝物がないのか・・・。

「だからみんな朝から声をかけてくれなかつたんだ・・・。」

天の瞳からなにかあついものがこぼれた・・・。ぼろぼろととめどなく流れ落ちるそれは天の頬を伝い、したたつた。黒板の言葉により天のたつた一つ希望は、絶ち切られた。宝物。それは・・・。それからというもの天は、学校を休みがちになつた。今まで、いじめられて、けなげに学校に登校し続けてきた天だつたが、さすがに今回は堪えた。

「もう、ぼくの宝物は、見つからないかもしいれないと・・・」

天は毎日そう考えるだけで、悲しくなつりひたすら泣く事しか出来なつた・・・。

天の求める宝物とはいつたい何なのか。何を求めていると言つのか。自分だけに無いもの・・・・・・。

きっと、多くの人は持つてているのだと思います。天の言ひ、宝物を・・・・。それが何かわかれれば、きっと、天の心は救われるのでしょうか・・・・・・。

思ひ出たる節はありますか · · · ·

天は夏休みを向かえ、平日よりは平穏な日常を送っていた。夏休みの宿題も一通り終わり、残りは自由研究だけだつた。……自由研究、何にしようかな……天も他の生徒と同じように自由研究で悩んでいた。

そんなある日、ニュースで、「中学生 いじめにより自殺」というのがやつていた。天はやはり、自分だけがこんな辛い目に遭つているわけじゃないんだと確信した。

「よし、これだ・・・！」

天は今日、社会問題になりつつあるいじめを取り扱う事にした。着々と準備を進め、一冊のノートにそれをまとめた。 イジメノセカイ ノート一冊分一杯にこめられた天の気持が形になつた。

始業式。まだまだ残暑の続く中、天は夏休みの宿題、自由研究を手に学校へ行つた。式は何の滞りなく執り行われた。各クラスに戻り、自由研究の発表会になつた。教室に戻り、天はかばんを探ると、「あ・・・・！」

と思わず声が出てしまつた。ノート一冊分の天の気持は無残に切り刻まれていた。いつたい誰が・・・。犯人はすぐにわかつた。クラスでもいじめの中心にいる健太だ。式の途中でおなかが痛いと訴え、一度抜けたのだ。健太しかいなかつた。

順番は迫つっていた。健太はニヤニヤと笑いながら、天のことを見ていた。

「次！・・・・・天君」

先生はそう言つた。天があくせくしていると、健太が、

「あつれー。もしかして、忘れてきたの？」

と言つた。天は歯を食いしばり、切り刻まれた一冊分のそれを教卓の上にたたきつけた。教室にはざわざわとしたどよめきが起こり、

健太もまさかあれを提出するとは思つても見なかつた。先生も、驚きを隠せなかつた。天は、

「これが、僕の自由研究です。・・・みんなが見てわかるように、切られています。ここには、僕の考えたいじめについての事が一杯に書かれていたんだ・・・・・」

と言つた。先生は、

「い、いじめ?どうこう」と?

と聞いた。

「先生。先生は知つていましたか?僕がいじめられてたつて。知らなかつたでしょ?・・・そんな事言って、悲劇のヒロインになるつもりはない。ただ、ただ僕は今いじめられている人の心が一番わかるんだ。僕がいじめられているから。どれだけ辛いか、苦しいか。耐えて耐えて耐え抜いた。それでも無理だつたときは死のうかと思つた。・・・でも、それじゃあ何も変わらないんだ。ただ楽な方に逃げてるだけなんだ。・・・今、自分は関係ないって思つてる人も関係あるんだよ。見てみぬ振りをするのも同じなんだよ。いじめられている人は何でもいいから手を差し出してくれる人がいればそれだけですっごく救われるんだよ。どうしてわかつてくれないいんだ・・・!」

と、天は教室にいる全員に問いかけた。教室には沈黙が響いた。教室にいる全員が天の言葉を重く受け止めた。天は、

「これで僕の発表を終わります」と席へ戻つた。

あの天の心の叫びの発表からも月日がたつていて、気がつけばもう卒業式の2週間前だつた。天はいまだにいじめられていた。が、以前より確実に強くなつていて、見てみぬ振りする人も居なくなつた。誰か彼かが声をかけるようになつた。だんだんと、天の言つていた宝物の意味がわかる人が増えてきた。それだけでも、天の心は救われた。

だが、天の鬪いはまだ終わらなかつた。天が望むものは“いじめの撲滅”自由研究にもそのことが切々と書いてあつた。

ある日の放課後、天は健太に呼び出された。天は、これがチャンスなんだと、静かについていった。

「お前さ・・・・・」

と健太が口を開いたとき、天は大きな声で言つた。

「僕のどこがダメ？」

健太は一瞬何を言われたのかわからなかつたが、すぐに、「は？」

と聞き返した。天は、

「何がダメ？」

と聞いた。健太は答えにつまつた。天にダメなところなど、どこにも無かつた。それは、健太も知つていた。しかし、健太にしてみればその完璧さが気に入らなかつた。

「お前にダメなところなんてねえよ。ただ、それが逆にムカつく」と健太は言った。天はうなづきながら聞いていた。

「別に、お前のことが嫌いなんぢやない。ただ、お前が完璧だから。何しても、頭いいから体育とかダメなんだろうなとか思つてたけど、しつかり出来るし・・・・・。その完璧さがムカつくんだよ」と健太は言った。天は、にっこり笑つて、

「僕は・・・・健太君が思つてるほど完璧ぢやない。完璧な人間な

んてどこにも居ないんだ。もし、人間が完璧だつたらそれは人間じゃない。ロボットだ。僕は、朝起きるの辛いし、ご飯食べるの遅いし、牛乳飲めないし、出来ない事なんてたくさんあるよ。僕は、完璧じやないんだ。みんなと同じなんだよ？」

と言つた。健太は、目を泳がせながら、何か考えていた。3分ほどの沈黙の後、健太が口を開いた。

「お前、俺のこと嫌いじゃないのか？」

と聞いた。天は首を振り、

「嫌いじやないよ。むしろ・・・・・好きかな？」

と言つた。健太は、

「は？」

と言い天をにらんだ。天はテレもせず、

「健太君は、いじめるけど、どこか、優しさがあつて。強いし。だから、健太君のこと僕は好きだな。健太君は？」

と聞いた。健太は、しばらく黙り込んだ後  
「・・・・・・・ごめん。今までいじめたりして」  
とつぶやいた。天は聞き返した。健太は、

「だああ、もう。ごめん。今までいじめて。・・・・これから、友達になつてくれるか？」

と言つた。天は大粒の涙をこぼしながら、

「うん」

と一言だけ言つた。

「あれから、13年経ちました。あの頃、本当に辛かつたり楽しかつたり、苦しかつたりしました。でも、だんだんと、一緒に考えてくれたり、感じてくれたりする人が増えてきました。そういう物です。いじめなんか。いじめなんかに負けてはいけません。いじめは最低の行為です。・・・・・誰が悪いのか、真剣に考えてみてください。・・・・・勿論、やっている人が一番悪いんです。いけないんです。でも、周りの人はどうですか？見てみぬ振りをしていませんか？時々便乗して、本当に騒ぎになれば私は知りませんって言つてませんか？・・・・・それも同じです。いじめている事に変わりはありません。いじめられている人は、誰からでも、何か声をかけてもらえば救われるんです。たったそれだけですけど、とっても、とっても助かるんです。・・・・・助けてあげてください。声を・・・・・かけてあげてください。お願ひします」

会場は拍手の渦に飲み込まれた。天は收まりきらない興奮を必死に抑えていた。

天はあの後、強くまっすぐに成長していった。現在、臨床心理士としてスクールカウンセラーとして、苦しみに立ち向かっている子供たちを救済していた。日本全国から天に講演をしてほしい、という問い合わせが相次いだ。それは、一冊の本からだった。本当のキモチ

天のいじめられた経験を元に、一人の主人公がどう判断し、どう成長していくのかを描いた物語であった。これが、臨床心理士になった天の名前を一気に広める事になった。そして、ついに日本政府から今年、一番平和に尽力した人として、第一回満天平和賞を受賞した。

「僕は、こんな賞をもらえる人間じゃないです。ただ、今まで僕を応援してくれた人たちに感謝します」

天は受賞の言葉として一言もつと言つた。

人間は誰しも高く、急な壁にいつかぶつかる  
それに対して、どう対応するのか  
周りはどう手を差し伸べるのか  
そこが、人間の真価を問われる場面なのだと思つ  
チ

歴史に名を刻まれるであろう、第一回満天平和賞受賞、本当のキモ

## 第5話（後書き）

駄文ですが、最後まで読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8561c/>

---

満天

2010年10月20日00時07分発行